柞乃杜

秩父神社社報
柞乃杜（ははそのもり）
第 6 号
平成4年7月23日

心のふるさと造り

秩父の文化は　遠く二千年のむかし　武蔵の国に先がけて開けました
しかし名高い秩父古生層は　はるか二億五千万年も前に誕生し
ハワイより遠くから一億年もかかって日本の大地となったものです

しかもこの地層に閉じ込められた原始生物の生命連鎖が
私たち人類をふくむ地球の生態系にれんめんと受け継がれているのです

この壮大な生命のドラマを
いまほんの二百年のうちに人間の手で壊そうとしている

二千年のむかしから秩父の先人たちが大切に敬ってきた故郷の風光を
いまほんの五十年のうちに我々の手で壊そうとしている

風光の破壊が心の荒廃を招き
家郷の喪失が多くの人間失格をもたらしているのです

実に二億年もの生命を秘めた秩父の大地に育ち
二千年の歴史をもつ家郷文化をしっかりと受け継ぐ業こそ
われらが誇る「心のふるさと」造りとなりましょう

健男（ますらを）

父のみの父の命
母そばの母の命
おほろかに心尽くして
思ふらむ　その子なれやも
健男や空しくあるべき

梓弓末振り起こし
投矢持ち千尋射渡し
剱大刀腰にとり佩き
足引きの八峯踏み越え
さしまくる心障らず
後の世の語り告ぐべく
名を立つべしも

反歌
健男は名をし立つべし
後の世に聞きつぐ人も
語りつぐがね

（萬葉集　巻第十九）

解説　秩父神社(六)

禰宜　浅見武史

◆徳川氏の関東支配

天正十八年（一五九〇）八月。徳川家康は江戸城に入り、関東領国支配の歴史を開始する。それ以前の家康は、駿府を本拠とし、駿河、遠江、甲斐、信濃、三河の五ヶ国を領地として、同国の領地統治に努力し、交通の整備、商工業の振興、新田の開発などに意を注ぎ、大々名として揺るぎない領国支配を確立していた。後北條氏の滅亡後、豊臣秀吉により後北條氏の旧領である伊豆、相模、武蔵、上野、下総の六ヶ国への転封を命じられ、これに従って江戸を本拠と定めた。正式に家康が江戸城に入ったのは、八月一日で、八朔は関東入国を記念する日となる。

当社所蔵『秩父大宮妙見宮縁起』に、家康の江戸城入城に関する記載がある。

「—略—家康公同じき年〈天正十八年〉の八月に相模国を御進発ましまして八王子より多摩、入間、高麗、比企の郡を越生より慈光、小川を巡らせられて当社へ御参詣成させられ、妙見軍神の霊祠を聞し召され、御武略御開運を祈り給ひける。是より当郡を西に廻らせられ鉢形、忍等の城地を上覧ましまして、鴻巣の宮地の御旅館に暫く御滞留ありて、江戸の御城へ入らせられて萬々歳を祝し給ふと也。公は寅の歳の御誕生にあらせ給ふが故に当社寅の秘方を御信仰思し召されて、大星妙見の大斎事秘方の御手洗を汲んで祈念を凝らし奉る。その揖水は神社の近き辺りなる七つ井戸として七星の神水今有りにけり。夫より後の年々に修方怠慢なくして郡の内の神主部七十餘人社頭に就いて烏帽子を傾け懇祈を練し奉るは此時よりぞ始まりける。—略—」

◆家康公と寅の秘方

前記『縁起』が記するが如く当社には当時、妙見、軍神、寅の秘方なる特別なる祈禱法が存在した。残念ながらこれに関する信仰伝承は今に現存していないが、家康と「寅」にまつわる物語は注目される。

家康は天文十一年壬寅歳（一五四二）生まれである。家康の関東入国の天正十八年は庚寅歳である。更に当社の大斎事は「寅」の秘方であり、大林山広見寺の住僧らが参詣して行われたという。「寅の秘方」は社殿東側の「寅門」より昇殿して厳修されたと伝えられる。更に重ねて、当社拝殿正面には「名工左甚五郎作」と伝える「子宝子育ての虎」の彫物がある。

末社　東照宮

寅、寅、寅、虎のオンパレードである。坂本才一郎氏（現埼玉県文化財専門審議員）によれば、当社の社殿彫刻は、天和年間（一六八一～一六八四）に江戸の代表的彫刻師、島村氏一門によって彫られたもので、当時、虎を描く定法に「群虎二一豹ヲ添エル」決まりがあった。それは虎の群れの中に、必ず一頭の豹を描くのが江戸初期流行した定法との事である。

樋口清之氏（現國學院大学名誉教授）は、『日本史探訪』の対談で、江戸時代虎と豹の関わりを次のように語っておられる。

「元禄という太平の時代があって、その後の田沼時代、ちょうど江戸には、この時代から見世物が非常にはやるんですね。この見世物の中にたとえば中国貿易でやって来た虎だとか豹がいたりするわけです。豹という動物は、虎とは違ふ動物ですけれども、当時の日本人は、豹を虎の雌だと思っているんです。従来の虎を雄だと思っているわけです。雌雄くらいの区別はつきそうなものですのに、見世物の看板に絵が書いてあるのを見ると、虎の絵をかいて虎の雄と書いてある。豹の絵を書いて虎の雌と書いてある。」

「子宝、子育ての虎」の彫物は、家康の寅歳生まれ故の寅の秘方と深い繋がりの上で社殿正面を飾ったものである。子虎を慈しむ母虎の姿を見事なまでに豹の形で表す、江戸期の文化を今に伝える当社の貴重な彫物である。

本年は丁度、家康公生誕四五〇年に当たる。当社二千年余の長い歴史に、家康公は大いなる崇敬の誠を遺した。天正十九年十一月、神領五十七石の御朱印状を下しおかれたのである。その故をもって、徳川三百年に亘り、二代将軍秀忠以下、歴代の将軍は、神君家康公に倣い、神領五十七石を安堵したのである。これひとえに、家康公の寅歳生まれと、当社大斎事寅の秘方の結ぶ神縁と思う次第である。

山岡荘八氏は小説『徳川家康』で、家康誕生を極めて象徴的に、「寅の歳の寅の日の寅の刻に、寅の神鉾をもって立つ、普賢菩薩の生まれ変わり」と表現している。

子宝、子育ての虎
（左　甚五郎作）

平成の宮造り——境内整備の意義

宮司　薗田　稔

数々の話題を呼んだリオの世界環境サミットが閉幕し、いよいよ全世界が真剣に取り組むべき共通の課題が、人類の生存を賭けた地球の環境保全だという時代を迎えることになりました。

つい一年前にソビエト連邦の崩壊で、戦後四十年を画した東西の冷戦構造が解消して、さまざまな国家と民族の再編成が、連鎖反応を起こしています。しかも新たに、いわゆる南北問題が登場し、その分裂抗争を内にはらみつつ、今や人類全体が避けようのない深刻な問題は、地球全体の環境問題なのだということがはっきりしてきたのです。

一　環境の危機は心の危機

かくいう私も、リオで同時に開催された「世界の議会人による地球サミット」に招かれて渡伯し、仏教代表のダライ・ラマ師や、地元カトリック代表のカマラ司教らの各宗教界指導者たちに交じって三日間の会議に出席してきました。会議の詳しい内容は別に報告するとして、出席した議会人と宗教人との一致した結論は、地球の危機が今や人類全体の精神の危機なのだ、という認識でありました。現代のあくなき物質文明の追求が、かえって人類の心の貧しさを際立たせてしまった。病める地球を癒すには、まず人類の干からびた心を潤すことが肝要だとは、出席した者誰もが思い知った結論なのです。

来年の春か秋には、日本の宗教会の尽力でこの地球サミットの京都会議が実現することになりました。会議の成功もさることながら、豊かな自然の風光を大切にしてきた我が国の宗教文化が、今こそ世界の指導者たちに強い感銘を与えることを期待したいものです。

二　心のふるさと

しかし、「グローバルに考え、ローカルに行動せよ」とは、これも現代の我々にぜひ、必要な心がまえでありましょう。地球環境の保全について自分に何ができるかを考えて、小さなことでも実行してみることも大事ですが、いま何よりも効果的なことは、地域社会の建直しではないでしょうか。まず住民どうしの心が通い合う生活社会を築くことが、やがて自然風土の大切さに目覚めることの第一歩を踏み出すことにもなるのです。家郷を思う心の潤いが、きっと自然を大切に育んできた我が民族の精神を再び喚び起こすにちがいない。

私どもは、そう信じて当社の宮造りを進めて行きたいと思っているのです。

武蔵国より古い歴史を誇る知知夫（秩父）の国に創建された当社は、いまに至るまで秩父地方の総鎮守、この山里に生まれ育った秩父びとの産土神として、変わらぬ「心のふるさと」でした。

三　秩父の宮造り

古くから当社は、「父の実のちちぶの里、母そ葉のははその杜」と歌われてきました。これは、『萬葉集』巻第十九に収められた大伴家持の有名な長歌に「父のみの父の命、母そばの母の命。おほろかに心尽くして、思ふらむ其子なれやも。ますらおや空しくあるべき。」とあって、父母の大きな慈愛のもと、立派に育った男子を励ます古歌にならって、歌い継がれてきたものです。文字どおり、父の地、秩父のふるさとに鎮まる、母なる鎮守の森を表現し、象徴的には、「乳の実」を付ける「乳の木」すなわち銀杏をご神木とし、「ははそ（柞）の杜」すなわち楢科の青葉が生い茂る森をヤシロとする当社

◆ 中央写真
ブラジル、リオ市の世界環境会議にて写す。
平成4年6月6日

の姿をみごとに表わした言葉でありました。

かつては広大で鬱蒼たる神苑も、風土を敬う先人の心を忘れた近代文明の手で、今や見る蔭もないありさまです。明治政府の上地令で周りの神領を奪われ、戦時政府の命令で大木を供出させられ、文化を無視する都市計画で境内を削られる、という無残な歴史が「心のふるさと」の潤いを失わせてしまったのです。

街の一角に豊かな神の森がある。ふだんは参拝する人びとの憩いの場であり、祭りの日には神事の賑わうマチ（＝マツリ）の場となる。

日本の家郷原理は、そのようにして神います杜（モリ）を生活の原点にしてきたのです。当社は、ぜひともこの原理を展開して、秩父の里を“潤いのふるさと”にしたいと思っています。

表紙説明

豁然と秩父の山河梅雨明けぬ　祭り太鼓の鳴り渡る日は

柿堺　欣一郎

「お祇園の晩」

川瀬祭のことを子供の頃はオギオンと呼んでいました。それでオギオンという言葉に愛着を感じるのですが、オギオンに繋がっているからです。

それは六歳の時のこと、肋骨カリエスで重態に陥り、親達は医師から「外科的療法以外に助かる見込はない。しかし、衰弱が甚だしいため可能性は極めて乏しい」と宣告されたそうです。親達は身内とも相談の上、手術に賭けることになり、その執刀がオギオンの晩だったのです。

以上の経緯は後になって聞かされたのですが、私の古い記憶の底に、病院へ連れて行かれる時、「今夜はオギオンだから笠鉾を見に連れて行ってやるよ」と賺されて祖母に抱かれ家を出て、明るい賑やかな通りを行った印象がかすかに残っているのです。

病院は秩父神社の近くにあり、宮森の老樹が枝をさしのべているあたりでした。肋骨切除はその頃としては大手術で、結果がどうあろうと異議は申し立てないという一札を入れた上で行われたそうです。主治医は、橋本章達先生という少壮気鋭の方でした。

幸いに手術は成功し、奇跡的に命をとりとめ、一年近い入院生活の後、全快することができました。そるからもう七十年経ちました。生死を分けた手術が、オギオンの晩に、秩父神社のすぐ傍の病院で行われ、危かった幼い命が救われたことに、オギオンとの深いゆかりを思わずにはいられません。

「中島無意先生作品について」

今回の表紙は、秩父在住の画家、故中島無意先生によって描かれた、当社夏祭り『川瀬祭』の風景である。

当地、本町の菓子製造業「一本本店」を商う父仁助、母ふさ乃の長子としてお生まれになり、東京で当時の新しい文化を身につけて帰郷され、家業の傍ら創作活動を続けられた。昭和三十四年には上町に居を移され、市内在住の画家の方々と共に『暁風会』を結成され、以後、それまでにも増して多くの作品を残された。

先生の作品には、多く人の手が加えられる前の秩父の風景が描かれており、武甲山をはじめ荒川、浦山、また、当社の夏冬の祭りなど郷愁を誘うものが多く、古き良き秩父を知る者にとっては懐かしく、感慨深い作品となっている。

今後、当社においては、社報をはじめ『新崇敬会館』完成後には会館ロビーにおいて、郷土の芸術家の作品を紹介すべく、今回、表紙に中島先生の作品を掲載させて戴いた。

今回、貴重な絵画をお貸し下さった遺族代表、豊泉美保子様には紙面を借りて厚く御礼申し上げると共に、読者の皆様にはこれを機に郷土の先人たちの業績を知って戴ければと思う。

本名　道太郎
雅号　vićo（ヴィッチョ）
明治三十六年二月二十六日生
昭和六十二年七月十五日没
（享年八十五歳）

御柱祭視察旅行を終えて

秩父神社氏子青年会
常任役員　小泉　賢

六年に一度の諏訪大社御柱祭。あいにくの天気だがバス二台に分乗し、秩父神社を出発、一路諏訪へと向かった。

前回の御柱祭のビデオテープを見ながら、車内はすでにお祭り騒ぎである。我我の騒ぎをよそに、無事にバスは諏訪大社本宮へ到着。一同は梟の半纏を羽織り、正式参拝の後、資料館を見学して昼食となった。境内には前回の御柱が立っており、その後ろ側は平らに削られて、祭りの荒々しさを物語っていた。

いよいよ木落とし坂へ向かう。交通規制のためにバスを臨時駐車場に置き、駅から木落とし坂まで直通の臨時バスで向かうことになった。夜祭りで言えば第一中学校から神社周辺へ向かうと言ったところだろうか。

既に見物人が集まっており、私達は河原で見学することになった。雨の中、時間を待つというのは長く感じるもので、ましてお祭りというのは時間通りに進まないのが常である。やがてラッパが鳴り、爆竹が周りの山々に響き渡り「ヨイショ、ヨイショ」の掛け声で、御柱が坂（崖）の上から迫り出してきた。しかし、まだまだ落とさない。今度はキヤリ歌が始まり、何人もが交代で叫びあう。やがてキヤリ歌が終わり、一瞬静かになったかと思った瞬間、「ワァー」と歓声が沸き上がり、御柱はわずか数秒で一気に下の公道近くまで落ちてきた。

河原で見ていた私達は、落ちる瞬間が手前の崖に遮られて見ることができなかった。残念である。せっかく見に来たのだから二本目はもっとよく見える場所でと思い、今度は崖の上から見ることにした。傾斜角度四十度から四十五度というところであろうか、よくここを、しかもあの巨木にまたがって降りられるものだと、つくづく祭りのすごさを感じた。

やがて御柱が姿を現した。いよいよ木が落とされようとしている。木の上では鼻乗りを目掛けて喧嘩までが始まっている。崖から木が迫り出し、後ろの綱が切られた。御柱は崖の下へと滑り出す。途中、上に乗っていた者が柱から振り落とされた。しかし、また乗ろうとしている。周りから柱目掛けて殺到する者もいる。まるで何かに取り付かれているように見える。日本中の祭りが曖昧になっていく中で、本当の祭りを見たような気がしてならなかった。

参加者の声

■六年に一度という貴重なお祭りを見学できたことを、たいへん嬉しく思っております。日本国中の祭りを見学したいものだと、常日頃から考えておりますが、神社が主催者となって視察旅行を計画していただけることは、経済的な意味からいっても、よろしいことではないかと思っております。一人で行ったのでは、なかなかお祭りの意味まで立ち入って理解できないものですが、それについても神社側から説明があり、たいへん勉強になりました。

ただ、御柱祭について言えば、観光客に対して見せるお祭りとしては未だ確立されておらず、安全面をはじめ、待ち時間が長い、トイレがないなど、今後考えるべき箇所も多いのではないかと思います。

（会員　加藤　茂男）

◆氏子青年会活動

平成三年十一月～平成四年六月

十一月
寶登山神社参拝
秩父夜祭りよもやま話

十二月
郡市茶道協会主催慈善茶会後援
勉強会「秩父神社の中世の頃」

二月
御柱祭り勉強会
第一回「夏祭りを考える会」

三月
第一回「夜話の会」
武蔵野御陵参拝と春の浅草探訪

四月
諏訪大社御柱祭り視察旅行
平成四年度総会

五月
武甲山登山
「夏祭りを考える会」勉強会

六月
奥秩父山開き
まつり部会勉強会
※その他各種恒例祭、助勤奉仕

◆氏子青年会々員募集

当社氏子青年会では、引続き会員を募集しております。歴史・祭いずれかの部会に所属して戴き、各種勉強会及びレクリエーションを通じて、会員相互の親睦を深めております。秩父市内に在住、若しくは主な勤務先を有する五十歳以下の青年男女の方。当社社務所までお越し下さい。

梟（ふくろう）だより

◆さくらそう展

五月の連休中、境内に展示された「さくらそう」をご覧になった方もあるのではないかと思う。両神村にお住まいの神林清一氏が、毎年欠かすことなくご奉仕をされてきた。「さくらそう」は埼玉県の県花にも指定されており、日本古来の伝統的な花でもある。明治以降、西洋さくらそうがその分布を広げて行った中で、日本さくらそうはその清楚なるがゆえに目立たない存在であったが、近年見直されつつあるという。

「さくら」の『さ』とは、田の神様の意であるとする説がある。つまり日本人にとっては、「さくら」とは多分に田の神様の御魂が籠もっている特別の花であるということだ。花と言えば「さくら」、中国人のように「牡丹」を連想する人も少ないと思う。「さくらそう」の慎ましやかな花びらは、今年も境内の一角に清清しい春の彩りを与えてくれたと思う。

◆奉祝事業世話人会開催

去る六月十九日、平成御大典記念『秩父神社境内改修整備事業』奉賛会の結成総会が開催された。宮司、井上奉賛会々長をはじめ、秩父を代表される方々のご臨席の中、事業の趣旨また奉賛会々則、役員及び委員選任の件、及び奉賛金勧募の件について審議された。今後、市内各地区において奉賛委員を通じ奉賛金勧募が展開されることとなる。

◆記念碑奉納

平成の御大典を記念して、秩父近衛歩兵第一聯隊会（会長近藤昌一氏）の皆様は、この偉業を後世に伝えるべく、当社に記念碑を奉納された。除幕式は当社浅見禰宜以下職員奉仕のもと、厳粛のうちに執り行われた。黒御影により製作された石碑には、歴代の天皇陛下をお守り申し上げた当地出身の近衛兵の皆様のお名前が記されている。

◆秩父神社妙見講

至　平成四年六月

十一月十二日　番場講
関根巧元講元外、百四十二名参拝
二月二十一日　宮ノ側講
高山公夫講元外、九十六名参拝
四月六日　白岡講
斎藤悦男　講元外、二十四名参拝
四月十二日　皆野講
関口ミツ代講元外、四百五名参拝
五月一日　上蒔田講
宮前信雄講元外、四十三名参拝
五月二十三日　原谷講
岩川福一講元外、五百八名参拝
五月二十四日　中宮地講
山口　清講元外、二百二十四名参拝
六月七日　熊木講
加藤正二　講元外、二百六十五名参拝
六月十四日　下宮地講
根岸恒太郎講元外、九十二名参拝
六月二十一日　近戸講
新井金三郎講元外、百六十三名参拝
六月二十五日　日野田講
新井六三郎講元外、八十九名参拝
六月二十七日　本町講
大島孝子講元外、百名参拝

◆御奉賛状況報告

自　平成三年十一月
至　平成四年七月一日

■奉賛金

金百万円
㈱成道会教団
松本　徳三
ははそ親睦会

金五十万円
大島　孝子
持田　恭三

金三十万円
秩父近衛歩兵第一聯隊
秩父郡市茶道協会

金二十万円
関口ミツ代
矢嶋　治夫
新井　政重

金十万円
富岡　邦人
高橋　宥子
北澤　春子
茂木正二郎

金五万円
秩父郷土会
原　友三郎
荻野　孝一郎
寺内　三郎
関口　勝男
俵木　聖治
中牧スイ子
秩父モラロジー事務所

金四万円
秩父神社氏子青年会
観月コンサート実行委員会

金三万円
浅見　重利
内山マスエ

金一万円
高山　粋啓
渡辺　奏査
寺沢布佐子
川添　昭二
富永ヤス子
稲田寿美好
塚本恵梨子
北野とも子
山野ふさ好
柿花さち恵
大津まさ華
上林登志朗
岩下　恭子
稲田比佐起
山本宗一郎
山本じつ子
三上昇一郎
西野よし子
西野加津也
西野ミサヲ
新垣とし恵
重岡　明美
興島夫久典
石川まさ好
富永　和也
富永　芳啓
恩田　兼寛
石鍋光司郎
佐藤真純夫
西村　耕一
森田　弘久
新井　保司
福島也重子
富田　紀元
横田　二三
松岡　武久
恩田紋三朗
恩田しず子
三上ひでこ
大津みさこ
土井　一之
土井やすこ
島田　寿三
安栗フサ子
遠藤糸万呼
和田　益枝
谷口　麻好
黒澤　武久
染谷　きん
西村　雅年
高橋　裕之
小池　エツ
浅見　忠一
河内　辰雄
大野　存子
石井　誠二
海戸よし江
鈴木　改衛
富田為三郎
小島　義雄
真尾　誠治
馬場　直也
矢澤　重一
柿島　浩子
坂本　寿男
北條　徳治
以上敬称略

■銅板基金

金二万円
柿島　和枝

金一万円
星野　進

■奉賛金

金　九、〇八〇、〇〇〇円

■銅板基金

金　二、九六四、〇〇〇円
（二、三八九名）

■総合計

金　一二、〇四四、〇〇〇円

◆辞令

宮司　学術功労により本庁より表彰を受ける。
（二月三日付　神社本廳）

奉賛会長　功労多大な役員総代として本庁より表彰を受ける。
（二月三日付　神社本廳）

巫女見習　関口裕美　巫女に任ず。
（四月一日付）

巫女見習　有本智美　願い出により職を免ず
（三月三十一日付）

◆特　報

大正天皇陛下の第四王子、三笠宮崇仁親王殿下におかれましては、去る五月三十日、当社に親しくお参りになられ、御本殿西側に欅の若木一株のお手植を賜った。

同日、当地地場産センターにおいて開催された、三笠宮会の例会にご臨席のため来秩されたもので、当日三笠宮会の諸氏をはじめ、当社宮司以下職員共々お迎え申し上げた。本殿にて玉串奉奠の後、御みずからお手植えをいただいた。

宮家の御参詣は、昭和五十九年四月十七日、秩父まつり会館落成式の砌、秩父宮勢津子妃殿下の御参拝以来のことである。

三笠宮様のお手植えは、秩父宮雍仁親王同妃両殿下、高松宮宣仁親王殿下に続いてのことで当社においてもこの上ない名誉あることと大切にお守りをする所存である。

奉祝事業ご奉賛のお願い

■奉賛金について

去る六月十九日の『御大典奉祝事業奉賛会』の発足によりまして、今後平成七年度までの四年間、秩父市内の各地におきまして、奉賛金のご寄付をお願い申し上げております。何卒事業の趣旨をご理解の上、各地区の奉賛委員の方を通じまして、また、当社社頭におきまして受け付けておりますので、ご寄進のほど宜しくお願い致します。

また、銀行振り込み等の方法でご奉賛を希望されます方は、社務所までご連絡下さい。

■銅板ご寄進について

奉賛事業に用います銅板のご寄進を、社殿右側の神札受与所前におきまして受け付けております。銅板と芳名帳にご記名の上、初穂料千円以上のご奉賛をお願い致します。尚、ご芳名いただきました帳面は、当社の社宝といたしまして永代保存させていただきます。

◆当社行事のご案内

■恒例祭

○九月二十六日～二十七日
境内諏訪神社御柱祭
二十六日夜、神社前番場通りにおきまして御柱の曳行を行います。

○十一月十五日（七五三詣）
男子（五歳）女子（七歳・三歳）をお祝いする伝統的な行事です。ご参拝をお待ち申し上げております。

○十二月一日～六日（例大祭）
十二月三日夜、日本三大曳山祭りに数えられる、例大祭御神幸祭の儀が執り行われます。

○十二月三十一日（大祓式）
半年間の罪汚れを祓い、清々しい気持ちで新年を迎えていただくために、例年午後二時より御神門前にて行っております。参列希望の方は、時刻前までに社頭にてお申し込み下さい。

■誕生祝いのご案内

一歳のお誕生日をお迎えになるお子様に、当社では誕生祝いの報告祭を行っております。変わらぬご加護をお祈り申し上げましょう。

尚、当社において命名式をお受けになられました方には、誕生日に際しましてご案内状をお送りさせて戴きます。

◆巫女さん募集

当社では社頭勤務の巫女さんを募集しております。神社に興味のある方、また仕事の内容など、ご質問のある方は社務所までご連絡下さい。

編集後記

■人類は今、地球の温暖化や森林破壊など、年々深刻さを増す環境問題に、やっと真剣に取り組もうとしています。

古来、日本人は自然を神と仰いで祀り、畏敬してきました。神道はまさに自然を媒体として、神と人とが結ばれた信仰です。そんな意味で日本の自然保護の根源は、私たちの祖先が大切に守り育んでくれた、神々の鎮まります緑豊かな「鎮守の森」にあるといえましょう。

欧米の人々は、厳しい自然と対決し、これを征服しようとしてきました。それに対して日本人は、自然の摂理に順応することによって、その生活を守ろうとしてきたのです。世界は今、「鎮守の森」に注目しています。ドイツの植物学者をして「日本の社叢を見て、祖先の賢明さに敬意を表する。現代人はこれらを大切に守って子孫に伝える責任がある。」とまで言わしめました。

時代の流れに流されることなく、まず身近にある「鎮守の森」を守り育てることから、私たちの地球環境保護を始めたいものです。

■社報「柞乃杜」第六号はいかがでしたでしょうか。皆様のご意見、ご感想をお待ちしています。

平成四年（一九九二）七月二十三日
編集　発行　秩父神社社務所
〒三六〇　埼玉県秩父市番場町一-一
TEL(0494)二二-〇二六二
FAX(0494)二二四-五五九六
印刷所　有限会社　拡文社印刷所
〒三六〇　秩父市東町二十七-八